草あやめ

泉鏡花

二丁目の我が借家の地主、江戸児(えどっこ)にて露地を鎖さず、裏町の木戸には無用の者入(い)るべからずと式(かた)の如く記したれど、表門には扉さへなく、夜が更けても通行勝手なり。但知己(たゞちかづき)の人の通り抜け、世話に申す素通りの無用たること、我が思(おもひ)もかはらず、然(さ)りながらお附合五六軒、美人なきにしもあらずと雖(いへど)も、濫(みだり)に垣間見(かいまみ)を許さず、軒に御神燈の影なく、奥に三味(さみ)の音(ね)の聞ゆる類(たぐひ)にあらざるを以(もつ)て、頬被(ほゝかぶり)、懐手(ふところで)、湯上りの肩に置手拭(おきてぬぐひ)などの如何(いかゞ)はしき姿を認めず、華主(とくい)まはりの豆府屋、八百屋、魚屋、油屋の出入(しゆつにふ)するのみ。

朝まだきは納豆売、近所の小学に通ふ幼きが、近路(ちかみち)

なれば五ツ六ツ袂(たもと)を連ねて通る。お花やお花、撫子(なでしこ)の花や矢車の花売、月の朔日(ついたち)十五日には二人三人呼び以(も)て行くなり。やがて足駄(あしだ)の歯入(はいれ)、鋏磨(はさみとぎ)、紅梅の井戸端に砥石(といし)を据ゑ、木槿(むくげ)の垣根に天秤(てんびん)を下ろす。目黒の筍売(たけのこうり)、雨の日に蓑(みの)着て若柳の台所を覗くも床(ゆか)しや。物干の竹二日月に光りて、蝙蝠(かうもり)のちらと見えたる夏もはじめつ方、一夕(あるゆふべ)、出窓の外を美しき声して売り行くものあり、苗や玉苗、胡瓜の苗や茄子の苗と、其の声恰(あたか)も大川の朧に流るゝ今戸あたりの二上(にあが)りの調子に似たり。一寸(ちよつと)苗屋さんと、窓から呼べば引返(ひつかへ)すを、小さき木戸を開けて庭に通せば、潜(くゞ)る時、笠を脱ぎ、若

き男の目つき鋭からず、頬の円(まろ)きが莞爾莞爾(にこにこ)して、へい〳〵召しましと荷を下ろし、穎割葉(かひわりば)の、蒼き鶏冠(とさか)の、いづれも勢よきを、日に焼けたる手して一ツ一ツ取出すを、としより、弟、またお神楽座(かぐらざ)一座の太夫、姓は原口、名は秋さん、呼んで女形(をんながた)といふ容子(ようす)の可(い)いのと、皆縁側に出でて、見るもの一ツとして欲しからざるは無きを、初鰹は買はざれども、昼のお肴なにがし、晩のお豆府いくらと、先(ま)づ帳合(ちやうあひ)を〆(し)めて、小遣の中より、大枚一歩が処(ところ)、苗七八種をずばりと買ふ、尤(もつと)も五坪(いつつぼ)には過ぎざる庭なり。

隠元(いんげん)、藤豆(ふぢまめ)、蓼(たで)、茘枝(れいし)、唐辛(たうがらし)、所帯の足(たし)と詈(のゝし)りた

まひそ、苗売の若衆一々名に花を添へていふにこそ、北海道の花茘枝、鷹の爪の唐辛、千成(せんな)りの酸漿(ほうづき)、蔓なし隠元、よしあしの大蓼、手前商ひまするものは、皆玉揃ひの唐黍(たうもろこし)と云々(うんぬん)。

　朝顔の苗、覆盆子(いちご)の苗、花も実もある中に、呼声の仰々しきが二ツありけり、曰く牡丹咲の蛇の目菊、曰くシヽデンキウモン也(なり)。愚弟直(たゞち)に聞き惚(と)れて、賢兄(にいさん)お買(か)ひな〳〵と言ふ、こゝに牡丹咲の蛇の目菊なるものは所謂(いはゆる)蝦夷菊(えぞぎく)也。これは……九代の後胤(こういん)平の、……と平家の豪傑が名乗れる如く、のの字二ツ附けたるは、売物に花の他ならず。シヽデンキウモンに至りては、

其(そ)の何等(なんら)の物なるやを知るべからず、苗売に聞けば類なきしをらしき花ぞといふ、蝦夷菊はおもしろし、其の花しをらしといふに似ず、厳(いかめ)しくシヽデンキウモンと呼ぶを嘲けるにあらねど、此(こ)の二種、一歩の外、別に五銭なるを如何(いかん)せん。

然(しか)れども甚六なるもの、豈夫(あにそれ)白銅一片に辟易して可ならんや。即(すなは)ち然り気なく、諭して曰く、汝(なんぢ)若輩、シヽデンキウモンに私淑したりや、金毛九尾ぢやあるまいしと、二階に遁(に)げ上らんとする袂を捕へて、可いぢやないかお買ひよ、一ツ咲いたつて花ぢやないか。旦那だまされたと思し召してと、苗売も勧めて止まず、

僕が植ゑるからと女形も頻に口説く、皆キウモンの名に迷へる也。長歎して別に五百を奢る。

垣に朝顔、藤豆を植ゑ、蓼を海棠(かいだう)の下(もと)に、蝦夷菊唐黍を茶畑の前に、五本(いつもと)三本(みもと)培(つちか)ひつ。彼(か)の名にしおふシヽデンは庭の一段高き処、飛石の傍(かたへ)に植ゑたり。此処に予(あらかじ)め遊蝶花、長命菊、金盞花(きんせんくわ)、縁日名代の豪のもの、白、紅、絞、濃紫(こむらさき)、今を盛に咲競ふ、中にも白き花紫雲英(はなげんげ)、一株方五尺に蔓(はびこ)り、葉の大なること掌(たなそこ)の如く、茎の長きこと五寸、台(うてな)を頂く日に二十を下らず、蓋(けだ)し、春寒き朝、めづらしき早起の折から、女形とともに道芝(みちしば)の霜を分けてお濠(ほり)の土手より得たる

もの、根を掘らんとして、袂に火箸を忍ばせしを、羽織の袖の破目(やぶれめ)より、思がけず路に落して、大(おほい)に台所道具に事欠(ことか)きし、経営惨憺仇(あだ)ならず、心なき草も、あはれとや繁りけん。シヽデンキウモンの苗なるもの、二日三日の中(うち)に、此の紫雲英の葉がくれに見えずなりぬ。

　茘枝の小さきも活々(いき〳〵)して、藤豆の如き早や蔓の端も見え初(そ)むるを、徒(いたづら)に名の大(おほい)にして、其の実の小なる、葉の形さへ定(さだか)ならず。二筋三筋すく〳〵と延びたるは、荒れたる庭に挘(むし)り果つべくも覚えぬが、彼処(かしこ)に消えて此処に顕れけむ、其処に又彼処に、シヽデンに似たる雑草数ふるに尽きず、弟はもとより、はじめは殊(こと)

に心を籠めて、水などやりたる秋さんさへ、いひ効（がひ）なきに呆れ果てて、罵倒すること斜（なゝめ）ならず。草が蔓るは、又してもキウモンならんと、以来然（さ）もなくて唯（たゞ）呼声のいかめしき渾名（あだな）となりて、今日は御馳走があるよ、といふ時、弟も秋さんも、蔭で呟いて、シヽデンかとばかりなりけり。

日を経（ふ）るまゝに何事も言はずなりし、不図（ふと）其のシヽデンの菜（さい）に昼食（ちうじき）の後（のち）、庭を視（なが）むることありしに、雲の如き紫雲英に交りて小さき薄紫の花二ツ咲出でたり。立寄りて草を分けて見れば、形菫（すみれ）よりは大（おほい）ならず、六瓣（べん）にして、其薄紫の花片（はなびら）に濃き紫の筋あり、蕋（しべ）の色

黄に、茎は糸より細く、葉は水仙に似て浅緑柔かう、手にせば消えなむばかりなり。苗なりし頃より見覚えつ、紛ふべくもあらぬシヽデンなれば、英雄人を欺(あざ)むけども、苗売我を愚になさず、と皆打寄りて、土ながら根を掘りて鉢に植ゑ、水やりて縁に差置き、とみかう見るうち、品も一段打上りて、縁日ものの比にあらず、夜露に濡れしが、翌日は花また二ツ咲きぬ、いづれも入相(いりあひ)の頃しぼみて東雲(しのゝめ)に別なるが開く、三朝(みあさ)にして四日目の昼頃見れば花唯一ツのみ、葉もしをれ、根も乾きて、昨日には似ぬ風情(ふぜい)、咲くべき蕾も探し当てず、然ればこそシヽデンなりけれ、申訳だけに咲いた

わと、すげなくも謂ひけるよ。

翌朝（あくるあさ）、例の秋さん、二階へ駈上る跫音高く、朝寝の枕を叩きて、起きよ、心なき人、人心なく花却（かへ）つて情あり、昨（さく）、冷かにいひおとしめしを恥ぢたりけん、シヽデンの花、開くこと、今朝一時（いつとき）に十一と、慌（あわただ）しく起出でて鉢を抱（いだ）けば花菫（はなすみれ）野山に満ちたる装（よそほひ）なり。見つゝ思はず悚然（ぞつ）として、いしくも咲いたり、可愛（かはゆ）き花、薊（あざみ）、鬼百合（おにゆり）の猛（たけ）くんば、我が言（ことば）に憤りもせめ、姿形のしをらしさにつけ、汝優しき心より、百年（もゝとせ）の齢（よはひ）を捧げて、一朝の盛を見するならずや、いかばかり、我を怨みなんと、あはれさ言ふべくもあらず。漱（くちそゝ）ぎ果て

つ、書斎なる小机に据ゑて、人なき時、端然として、失言を謝す。然(しか)も夕(ゆふべ)にはしをれんもの、願くば、葉の命だに久しかれ、荒き風にも当つべきか。なほ心安からず、みづから我が心なかりしを悔いたりしに、次の朝に至りて更に十三の花咲けり、嬉しさいふべからず、やよや人々又シヽデンといふことなかれ、我が家のものいふ花ぞと、いとせめて愛(め)であへりし、其の日、日曜にて宙外(ちうぐわい)君立寄らる。

巻莨(まきたばこ)の手を控へ掌(たなそこ)に葉を撫して、何(なん)ぞ主人のむくつけき、何ぞ此の花のしをらしきと。主人大いに恐縮して仮名の名を聞けば氏も知らずと言はる。忘れた

り、斯道(しだう)に曙山(しよざん)君ありけるを、花一ツ採りて懐にせん
も惜(をし)く、よく色を見、葉を覚え、あくる日、四丁目の
編輯局にて、しか〲の草はと問へば、同氏頷きて、
紙に図して是ならん、それよ、草菖蒲(くさあやめ)。女扇の竹青き
に紫の珠を鏤めたらん姿して、日に日に装(よそほひ)増(まさ)る、草
菖蒲といふなりとぞ。よし何にてもあれ、我がいとほ
しのものかな。

底本：「日本の名随筆1　花」作品社
１９８３（昭和58）年２月25日第１刷
１９８８（昭和63）年５月20日第13刷
底本の親本：「鏡花全集　巻二八」岩波書店
１９４２（昭和17）年11月発行
入力：真先芳秋
校正：kazuishi
２０００年３月３日公開
２００５年11月８日修正
青空文庫作成ファイル：
このファイルは、インターネットの図書館、青空文庫

（http://www.aozora.gr.jp/）で作られました。入力、校正、制作にあたったのは、ボランティアの皆さんです。